

子どもの発達と幼稚園・保育所における遊具の活用について

The Development of Infants and the Usage of Playthings in Kindergartens and Nursery School

宮 川 和 三* ・井 上 眞美子**
徳 田 泰 伸***

(平成28年1月20日受理)

要約

子どもの成長発達過程における大切な要素として、運動能力（行動）・体力（健康）・人間関係（信頼関係）が挙げられる。昨今、我が国では、子どもの運動能力低下への対策が教育課題の一つとなっている。運動能力の低下については、様々な要因が考えられるが、屋外での遊びが少なくなったことも、理由の一つに挙げることができよう。本論では、幼稚園教諭や保育士を希望して学ぶ学生を教育する立場から、幼稚園・保育所における「屋外遊具の活用」について考察する。

キーワード：遊具、子ども、幼稚園・保育所

keywords：Playthings, Child, Kindergartens and Nursery School

1. はじめに

筆者らは、本学が兵庫女子短期大学と称していた頃より、「幼児体育」「健康スポーツ科学」等を担当しており、教授年数は30余年になるが、昨今、社会情勢が変化していく中で、学生の保育者になろうとするモチベーションが低下し、子どもへの接し方、保育に対する想像力などについて問題を有する学生が多数みられるようになってきたことを危惧している。社会情勢の変化、生活実態の変化に伴い、保護者の保育に対する価値観、子育てについての考えなども変化していく中で、保育者養成校の教員として、どのように学生と関わり、指導していけばよいのかということが、大きな課題になっていると考えている。学生が、よき保育者となるために、モチベーションを高め、想像力を豊かにしていくためには、どのような保育者養成の在り方が必要とされるのか。このような問題意識を持ちながら、筆者らは、「幼児体育」「健康スポーツ科学」の授業を通して、学生との関わり

方を模索している。ここでは、筆者らが長年取り組んできた「屋外遊具の活用」の在り方を考察することを通して、上記課題の克服を模索することにした。

2. 幼稚園・保育所における遊具の変遷と活用について

幼稚園や保育所においては、幼児が興味や関心をもって遊具に関わり、このことを通して主体的に成長発達していくことが重視されている。幼稚園や保育所に設置されている遊具は、園児の成長発達に重要な役割を果たすものである。

幼稚園教育を中心にして述べれば、幼稚園における遊具については、学校教育法第3条を根拠に、幼稚園設置基準が、必要事項を規定している。

昭和31年に制定された同設置基準では、最低限必要と考えられる遊具が、すべり台、ぶらんこ、積み木、というように、個別・具体的に規定されていた。しかしながら、時代の変化、子どもの生

(*みやがわかずみ 保育科教授 体育学)

(**いのうえまみこ 保育科教授 舞踊学)

(***とくだやすのぶ 兵庫大学健康システム学科准教授 健康・スポーツ科学)

活実態の変化に伴い、平成7年制定の幼稚園設置基準が「幼稚園には、学級数及び幼児数に応じ、教育上及び保健衛生上必要な種類及び数の園具・教具を備えなければならない」と規定することにより、遊具に係る規定の大幅な大綱化が進められ、現在に至っている。

このような改定に基づき、幼児期にふさわしい生活が展開できるよう、各幼稚園や保育所などにおいて、その地域に応じた遊具が工夫され、従前のすべり台、ぶらんこといった固定・個別の遊具から、すべり台、ぶらんこ、ジャングルジム、登り棒などを組み合わせた総合遊具が多く取り入れられるようになってきた。また、自然環境を取り入れたビオトープや、木を主体にしたアスレティックなどが多く取り入れられるようになっている。

これらの総合遊具やビオトープに対しては、子

どもたちは強い興味や関心を示し、遊びにも創意工夫が見られるようになった。次に示す写真は、筆者らが今までに考案し設置してきたアスレティックやビオトープの一例である。



写真3



写真1



写真4



写真2



写真5



写真6



写真7

3. 子どもの遊びの実態について

子どもにとって、遊びは生活そのものであり、遊びを通して、運動能力、体力、知的好奇心、思考力を発達させ、人間関係など生活に必要な多くのことを学んでいく。そして遊びは、与えられるものでなく、基本的には子ども自身が作り出していくものでもある。しかし昨今、子どもの生活のリズムは、大きく変化してきている。2・3歳児からいろいろな稽古ごとに通うなど、「自由に遊ぶ」時間が、次第に制限されてきているように思われる。

今日、各地域において、就学前の子どもが遊んでいる姿をあまり見ることはできない。一部の報道によると、幼稚園や保育所が所在する付近の住民から「子どもの声がうるさい」という苦情があり、その苦情に対応するためのいろいろな施策が

とられているが、解決策は見つからない、とのことである。自由遊びは制限傾向にある、というのが実態のようである。

子どもは、自由に遊ぶことによって、自分自身がより楽しく遊ぶための多くのことを発見する。そして、工夫しながら遊びを展開していく。

大人目から見たら「危ない」「汚い」という行動であっても、子どもの目は輝き、多くの発見がある。衛生面や危険から子どもを守り、子どもの思いが発展していくように援助していくことが大人の大切な役割である。「〇〇をしてはいけない」というような規制を加えることが大人の役割ではない。このような観点からみれば、遊具は、子どもの遊びを発達させ、子どもの成長発達を促していく大きな役割を担っているものなのである。

子どもは出生すると、母親とのかかわりから始まり、家族へのかかわりへと広がっていく。そして1歳ぐらいになると自分で自由に行動できるようになり、行動範囲が広がってより多くの相手を求めるようになってくる。また3歳から4歳ぐらいになってくると、自分と同じ仲間を求めるようになり、仲間遊びが始まる。さらに仲間とのかかわりの中で、いろいろと試行錯誤しながら遊びの楽しさを身につけていく。

現在ではこのような自然発生的な子どもの遊びが、少子化、核家族化などの社会情勢の中で「作り出す遊び」から「与えられる遊び」へと大きく変化してきている。その一つの例がコンピュータゲームの普及である。コンピュータゲームは、人と向き合うのではなく機械との向き合いであり、安全ということが優先され体を動かすという体験が殆どないように思われる。もちろん安全性の確保は大切であるが、幼児期の子どもにとっては、成長発達から見た順序性においても、体を動かし、仲間とかかわって遊ぶという体験をすることがより大切であると考えられる。しかしながら、子どもの遊びの実態は、作り出す遊びから与えられた遊びへ、自然を対象とした遊びから規格品を対象とした個人的な遊びへ変化していると思われる。

4. 保育者養成校の学生が考案した遊具について

現在、幼稚園教諭、保育士資格を取得することを希望して学んでいる学生は、少子化、核家族化という社会情勢の中で乳幼児期を育ってきているので、殆どの学生が養成校において実習に行くまで乳幼児とかかわる体験をしていない。実習に行くと、はじめて乳幼児期の子どもとかかわったという学生が殆どである。実習記録を見ても「○○をしていた」という表面的なとらえ方をしている。

遊具においても、子どもがどのように活用しているかということを見るのではなく、すべり台はすべるもの、ぶらんこは乗ってこぐものという、型通りの見方をしている学生が多く、「○○ちゃんは上手に滑っていた」とか、「上手にこいでいた」とかいう見方が多く、逆に「○○ちゃんは滑らずにすべり台の下でばかり遊んでいる」というような見方をしている学生は少ない。

実習後、「保育内容」の授業において、「どのような遊具が子どもの遊びをより豊かにし成長発達を促す手立てとなっているか」ということをテーマに、「園庭に設置することが望ましい遊具」の模型の制作を指導した。学生をグループに分け、制作に必要な材料は、机上で作業のしやすい割り箸、段ボール、接着剤などを基本として提示した。

授業の進捗状況と学生の反応について

- ①グループ（4～5名）に分かれ制作する。
- ②材料は身近にあるものを生かし、どのグループも同じものを使用することを原則とする。

提示した材料

段ボール タコ糸 割り箸

提示した用具

カッター ボンド はさみ

③指示事項

- ・割り箸を切ったりつないだりして遊具の基本形を作る。
- ・グループで協力して想像力をふくらませ、子どもがどのように遊ぶかを考えてオリジナルな遊具を作る。
- ・大型遊具、中型遊具、小型遊具に分け、それ

ぞれの遊具の特徴を生かしたものを作る。

- ・子どもが遊んでも壊れない、安全性を考慮したものを作る。

④学生の制作における感想と反省

- ・子どもがどのように遊ぶかをイメージすることは難しく、取り組むまでに時間がかかったが、グループで話し合いながら楽しく制作することができた。
- ・アスレチックといわれても、今までに経験したことがないので、イメージすることができず、時間内には制作することができなかったが、グループで試行錯誤しながらなんとか糸口を見つけることができた。
- ・幼稚園や保育所で見た普通のぶらんこやすべり台を作る予定をしていたが、実習で子どもがいろいろと考えて遊んでいたタイヤブランコを思い出し、グループで話し合い、タイヤを主体にした自由に変化ができる遊具を考えて制作に取り組んだ。
- ・アスレチックの制作をすることにしたが、公園で見たアスレチックのイメージしか思いつかず、どのようにすれば子どもが楽しく遊び、体力の向上につながるかということを考えていくことが難しかった。これから公園などでアスレチックを見たら、どのような意図で作られているか、関心をもって見ていきたいと思った。
- ・今まで子どもが遊具を使ってどのように遊んでいるかについて考えたことがなかったので、遊具の制作についてイメージがわからず難しかった。

⑤作品例



写真8

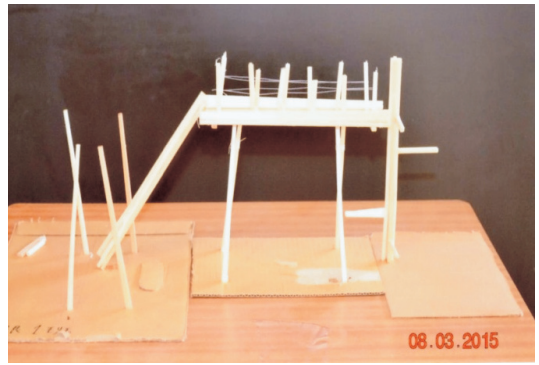


写真11

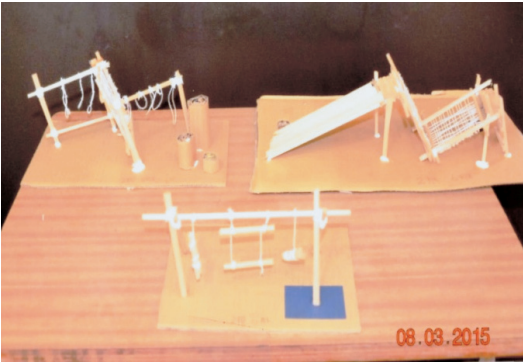


写真9

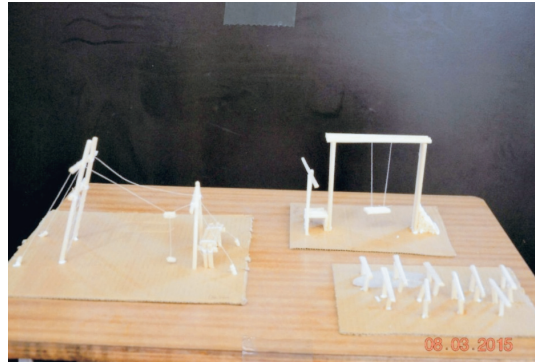


写真12

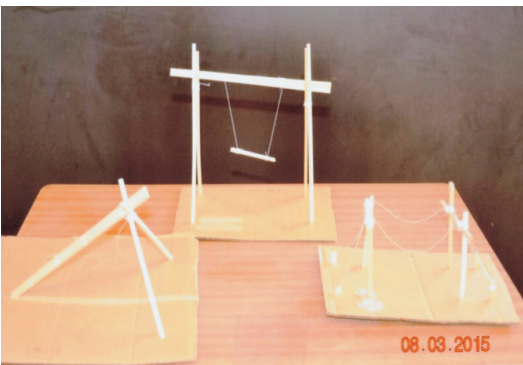


写真10

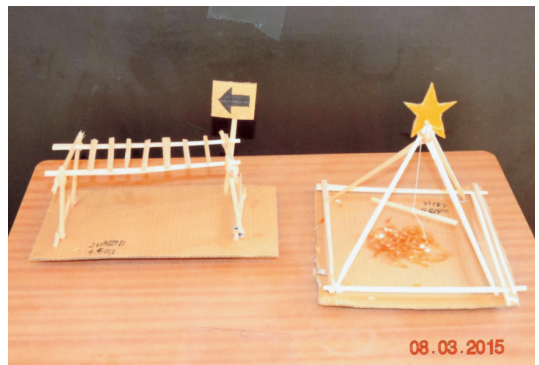


写真13

これらの作品を見ても、子どもがいろいろ考えて遊びを豊かにしていくということを主たる目的とする独創的なものは殆ど見られず、既成の遊具を模倣しているものが多い。いろいろな面で体験の少ない学生においては当然の結果であると思われるが、今後の指導において、子どもの成長発達を促し、幼児期にふさわしい生活が展開できる遊具が考案できるように指導していきたいと考えている。また、それぞれが意見を出し合って一つのものを作り出すという経験が少ないので、自分の意見をしっかりと持って話し合い実践させる機会をつくりたいと考えている。

5. まとめ

乳幼児期の子どもの実態を理解し、発達の特徴を踏まえ、幼児期にふさわしい生活ができるようにするための遊具の在り方について、より考察を深めていきたいと考えている。兵庫大学附属加古川幼稚園を活動の場として、従前から多くの木製遊具やアスレティック、ビオトープなどの制作を行ってきたが、木の耐久性や、鳥インフルエンザ流行などの問題があり、多くのものを長期に保持していくことが困難となっている。自然環境が少なくなり、高学歴社会において偏差値教育が進行するなどの情勢の中で、子どもの遊び場、遊ぶ時間は減少している。このような社会現象の中で、幼児期にふさわしい生活を展開していく上で、幼稚園や保育所における保育の役割は大きい。幼稚園や保育所に設置され整備されている遊具は、子どもの成長発達において大きな役割を担っている。アスレティックやビオトープについては、いろいろなところで研究され、多くの幼稚園や保育所で普及してきている。保育者養成校においても、学生がこれらの実態を理解し、より多くの体験ができるよう指導し、また、学生の保育に対する意欲的な取り組みを可能とする教育を推進したいと考えている。

〈参考文献〉

1. 文部科学省「幼稚園教育要領」2008年3月
2. 厚生労働省「保育所保育指針」2008年3月
3. 徳田泰伸「遊び・運動能力・体力づくり—変わりゆく子どもたちの姿を追って—」2013年 みらい
4. 和久洋三「おもちゃから童具へ」1978年 玉川大学出版部